

Fビレッジ都市OS構想

01

— 情シスが“街の中樞神経”になる経営モデル —

対象 エスコンフィールドHOKKAIDO / Fビレッジ

主体 ファイターズ スポーツ&エンターテイメント

テーマ：街づくり × 興行 × 商業 × 不動産 × データ

発表者：株式会社ラスク

なぜ「従来型情シス」では限界か

FSEの経営構造は「企業」ではなく「都市」である

観点	一般企業（従来型）	FSE / Fビレッジ（都市型）
管理対象	社内リソース・従業員	来場者・街・事業横断
データ	売上・原価・勤怠	人流・体験・感情・滞在時間
IT役割	業務効率化・コスト削減	体験価値（CX）の最大化
意思決定	月次・四半期ベース	分単位・イベント単位

これまでの情シス
システム管理部門



これからの役割
都市そのものを制御する中枢機能

FSEは単なる企業ではなく、来場者、テナント、地域を含む都市エコシステムである。従来の企業IT部門の枠組みでは、この複雑な都市機能を制御することは不可能である。

情シスの再定義

情報システム部門は、もはやサーバールームに閉じこもる技術者集団ではありません。Urban Technology Office (UTO) として、街全体の体験を設計し、リアルタイムデータで都市を最適化する戦略部門へと進化する必要があります。

× 従来の情シス像

- **サーバ・ネットワーク管理者**
(インフラの保守運用のみ)
- **社内業務の裏方**
(コストセンターとしてのIT)



✓ 新しい情シス像

- **都市体験の設計者**
(Experience Architect)
- **リアル×データの翻訳者**
(Real-Digital Translator)
- **事業横断の意思決定基盤構築者**
(Decision Platform Owner)

NEW ROLE DEFINITION

情シス = Urban Technology Office

アイデア① : F-Village Urban OS

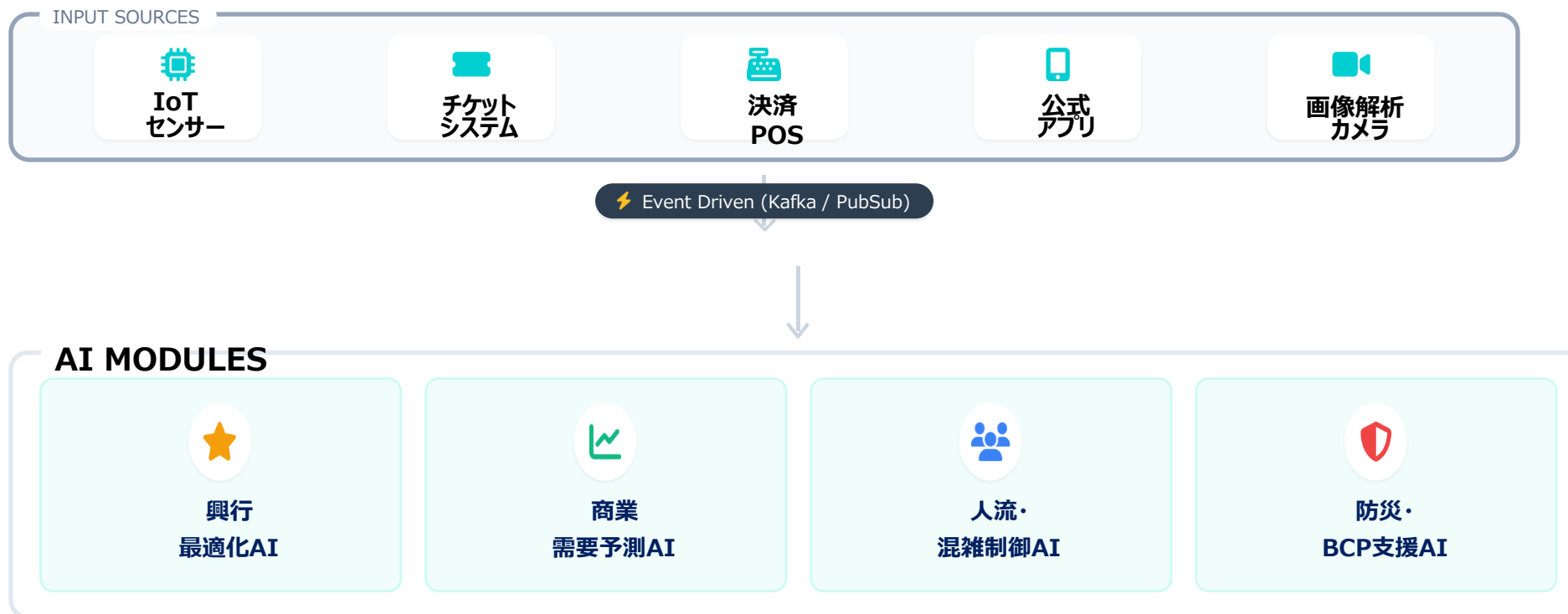
都市を「1つのOS」として制御する統合モデル

F-Village Urban OSは、興行・飲食・物販・不動産・人流という5つの都市機能を単一のプラットフォームで統合する。各サイロ化されたシステムをイベント駆動アーキテクチャで連携させ、街全体のKPIをリアルタイムで最適化する。



Urban OS : システム構成

リアルタイムデータ基盤とAIモジュールの論理アーキテクチャ



入力層 (IoT、チケット、決済、アプリ、カメラ) からイベント駆動基盤 (Kafka/PubSub) を経由し、時系列DBとDWHに集約。その上で4つのAIモジュール (興行最適化、商業需要予測、人流制御、防災支援) が予測と提案を行う。

TECHNICAL REALITY

AIは「完全自動化」ではなく、人間の意思決定を支援する「予測と提案」に特化して実装

Urban OSが生む経営価値

Urban OS導入により、KPIは事業別から街全体最適へ、意思決定は経験と勘からデータ即時反映へ、現場調整は事後対応から事前制御へと転換します。試合終了15分前に飲食増員を指示したり、混雑予兆を検知して動線分散を促すなど、即効性のある経営判断が可能になります。

📈 KPIの最適化

事業別



街全体最適

🧠 意思決定

経験と勘



データ即時反映

🔧 現場調整

事後対応



事前制御

📍 Urban OSによる即効性のある具体例



飲食人員配置の最適化

試合終了15分前の人流予測に基づき、飲食店スタッフを増員配置。ピーク時の機会損失を最小化する。



混雑緩和と回遊促進

特定エリアの混雑予兆をAIが検知。サイネージやアプリで動線分散アナウンスを行い、快適な滞在を実現。

来場者ID × XRM

従来の会員管理では年齢・性別などの静的属性で顧客を分類していました。XRM（eXperience Relationship Management）では、チケット履歴、来場頻度、飲食嗜好、購買行動、滞在動線、天候・曜日との相関など、行動履歴を人格単位で統合し、一人ひとりに最適化された体験を提供します。

統合ID基盤

- ✓ チケット・決済・アプリのIDを統合
- ✓ 単なる会員管理を超えた **人格単位**の識別
- ✓ 来場頻度や同伴者情報の一元化

体験ログ

- ✓ 飲食嗜好データの蓄積
- ✓ グッズ購買履歴の分析
- ✓ 滞在動線とエリア回遊状況の可視化

深層理解

- ✓ 天候・曜日・イベント種別との相関
- ✓ 静的な「属性」ではなく動的な **「行動履歴」**で理解
- ✓ LTV向上に繋がる真の顧客理解

アイデア③ 非開催日AI収益化

非開催日の稼働率予測は現状、担当者の経験に依存し、企画も属人化している。Urban OSは、人流データ、天候予測、地域イベント情報、過去実績を統合し、AIが最適用途（マルシェ、企業研修、修学旅行、eスポーツ大会など）を収益予測付きで自動提案する。これにより、非開催日の収益機会を最大化できる。

! 現在の課題

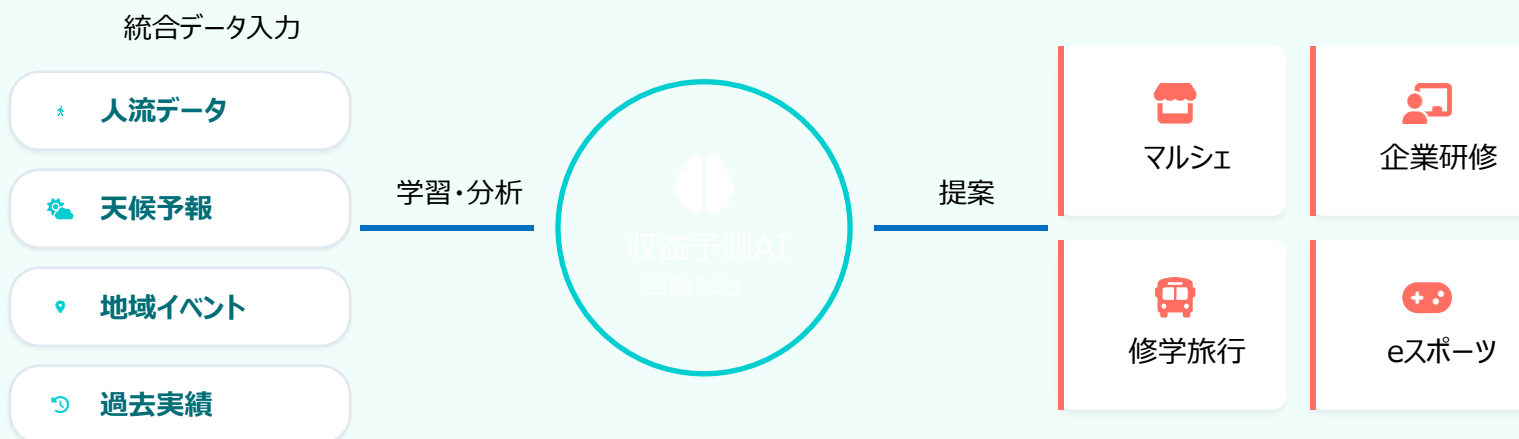
📅 稼働率予測が困難

興行がない日の人流が読めず、スタッフ配置や在庫管理が手探り状態

👤 企画の属人化

イベント企画が担当者の経験と勘に依存し、再現性がない

💡 解決策：AIによる最適用途の自動提案



アイデア④ : APIエコシステム

価値が外部から“勝手に増殖”する仕組み

Urban OSの真の価値は、FSE単独の最適化にとどまりません。テナント、ホテル、交通機関、観光協会、自治体にAPIを開放することで、外部パートナーが独自サービスを開発し、エコシステム全体で価値が増大します。

情シス（UTO）の役割

</> 開発者管理（Developer Portal）

🔑 権限・データ統制（Security）

🛡️ 品質担保・SLA管理



アイデア⑤：デジタルツインFビレッジ

仮想空間に「経営判断用の街」を持つ

物理空間のFビレッジを仮想空間に高精度で再現したデジタルツインを構築。物理とデジタルの双方向連携により、リスクなく経営判断を検証し、実験と学習のサイクルを加速します。

🕒 店舗配置のROI比較

🗺️ 動線変更シミュレーション

☁️ 災害・悪天候対応（BCP）

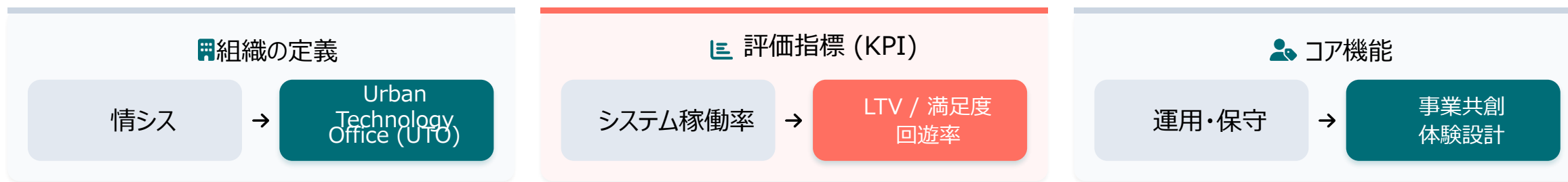
🔍 将来拡張の投資判断

不動産・興行・商業の共通言語となる

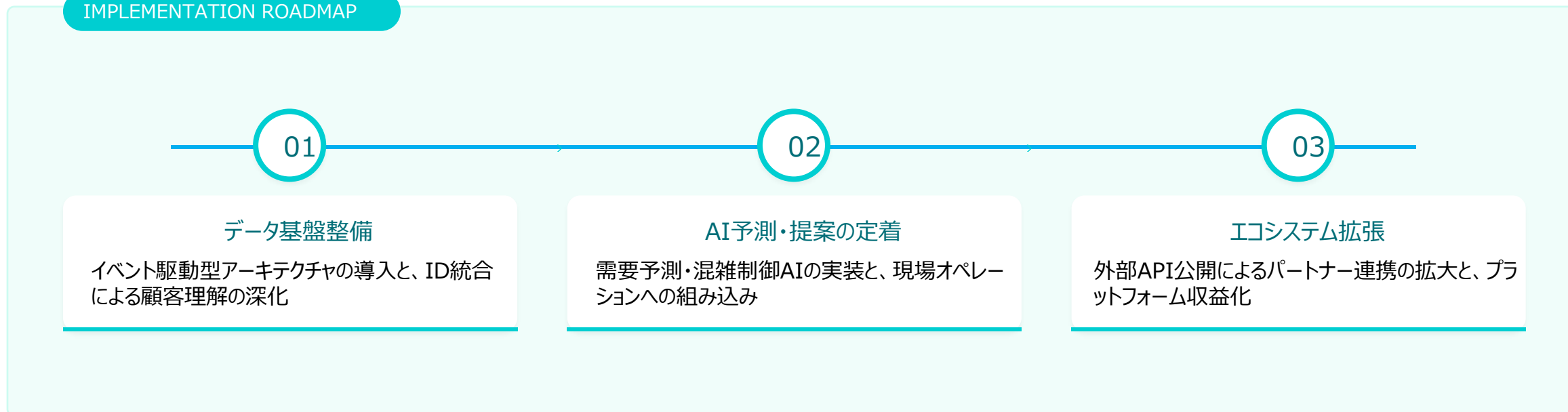


組織再設計 : Urban Technology Office

情シス部門からUrban Technology Officeへの進化は、単なる名称変更ではない。KPIを稼働率からLTV・満足度・回遊率へ、役割を運用から事業共創へと転換し、データ基盤整備（Phase1）、AI定着（Phase2）、外部API拡張（Phase3）の3段階で実現する。



IMPLEMENTATION ROADMAP



総括：日本唯一の実証場を活かす



都市 × エンタメ × データ

Fビレッジは単なるスタジアム周辺開発ではなく、データ駆動型都市経営の実証フィールドである。

リアルとデジタルの融合による新しい価値創造を目指す。



体験設計エンジニア集団

Urban Technology Officeは、街の体験を設計するエンジニア集団として、来場者満足度、回遊率、LTV、スポンサー価値を向上させる。



成功モデルの横展開

この成功モデルは他地域・他スポーツへ横展開可能であり、日本の都市経営に新しいパラダイムをもたらすポテンシャルを持つ。

KEY SUCCESS METRICS

😊 来場者満足度

👣 エリア回遊率

∞ LTV (Life Time Value)

👤 スポンサー価値

NEXT ACTIONS

Step 1
PoC対象選定

Step 2
優先KPI合意

Step 3
実装開始

詳細補足資料

用語集

Urban OS (都市OS)

都市機能を横断制御するデジタル基盤。興行、商業、交通などのデータを統合し全体最適化を図る。

XRM (Extended Relationship Management)

従来の会員管理を超え、人格単位での行動履歴や環境要因を含めた広範な関係性管理。

デジタルツイン

物理空間（リアル）の情報を高精度に収集・再現した仮想モデル。シミュレーションや予知保全に活用。

データガバナンス

PIIの最小化・匿名化収集を必要最小限に抑え、分析時は即座に匿名化。

同意管理 (CMP) 利用目的を明示し、提供範囲をユーザーが制御。

権限分離データアクセス権限を厳格に分離し不正利用を防止。

監査ログすべてのアクセスと操作ログを記録・監視。

API利用規約・レート制御外部連携時の範囲を契約で縛り、技術的に流量制限。

リスク対策

BCP / DR設計

システム冗長化と遠隔地データバックアップにより、災害時でも都市機能の継続性を確保。

AIモデルバイアス監視

AI判断が特定属性に不利にならぬよう、公平性を定期検証しバイアスを補正。

説明責任の確保

AIによる自動提案や制御の根拠を、人間が理解できる形で説明可能な状態を維持 (XAI)。